

## 「問題」としての変則事例：環境アイコンの生成と価値の調整

紀平知樹（兵庫医療大学）

「事例に基づく研究」とは何を意味するのか。例えば教育の場面ではアクティブラーニングの一環としてPBL(Problem Based Learning)という学修方法がとられるようになってきている。伝統的な系統的学習においてはまず原理が教えられ、そのあとでそれらの原理を用いて行われる応用問題が設定される。それに対してPBLではその名の通り、まず問題が学修者に与えられ、学修者はその問題を解決するために必要な知識は何かを考え、学び、問題解決を試みる。この対比をヒントに応用倫理学における事例を考えてみよう。

医療倫理の教科書では、まずは倫理理論が教えられ、そのあとで具体的な各論へと進んでいくことが多い。これは基本的には系統的学習の手順を踏んでいるとみることができる。この場合、事例は理論の適用対象である。

しかし医療倫理でも系統的学習だけでなく、ケーススタディも用いられる。これは実際に目の前に存在する医療者や患者の抱える問題を解決するために、事例を通して臨床における分析力や判断力を涵養しているといえるだろう。この場合の事例は類似する事例の範例の役割をもつ。

もう一つのタイプの事例を考えることもできる。それはパラダイム論における変則事例のようなものである。そのような事例は理論の適用対象ではなく、むしろその事例そのものが新しい理論を要求していると考えられる。例えば世代間の公平という問題はそうした問題の一つと考えられるかもしれない。

以上のようにみえてくると応用倫理学の一分野としての環境倫理学における事例について、(1)理論の適用対象としての事例、(2)範例としての事例、(3)変則事例という3つの可能性を考えることができる。

本提題では、第3のタイプの事例としての可能性を持つものとして豊岡市でのコウノトリ再生事業について検討してみたい。特にコウノトリという野生動物が環境アイコンとなり、諸価値を調整するシステムとして機能することに注目する。コウノトリは明治期以降の乱獲により、絶滅が危惧されることとなり、保護すべき価値を持つ希少種となった。ただし地域の住民にとってコウノトリはそうした単一の価値を持つ存在というわけではない。むしろ多元的な価値を持つ存在であった。そうした多元的な価値を希少性という単一の価値へと収斂させることで、その価値に同調しない、あるいは同調できない者を生み出す。しかし現在ではそうした諸価値の対立を乗り越えて、コウノトリを中心とした街づくりが行われている。このプロセスに注目することによって、環境倫理学の古典的な問題設定である自然の内在的価値と道具的価値の二項対立が有効な図式ではないということが再確認できると思われる。また環境倫理学が実践でもあり、理論でもあるなら、様々な事例を収集し、範例となりうる事例をみいだすことは、他地域の「類似」の問題に対する理論的な貢献ともなりうるのではないか。